

やんさノエ

会報

2004 No.3



発行 江差追分会

2004.12.20

北海道檜山郡江差町中歌町193-3

TEL 01395-2-5555

FAX 01395-2-5544

ホームページアドレス <http://www.hakodate.or.jp/oiwake/>



石庭の

江差追分節歌碑

石庭風の追分節歌碑が玉砂利の
前庭によく似合う。

歌碑の記念誌『目で見る追分
節のうつり変り』が発刊された。
写真で時代時代の追分の歴史を
たどることができる。

歌碑ができて思うことは、追
分を形として見られるようにす
ることも、追分節発祥の地を理
解する方法のように思う。

新地花街の小榭見番、津花岬
の浜小屋、佐之市追分はじめの
切石坂、漁師が唄った正覚院の
坂道、豊部内大橋の追分統一の
宿など、など。

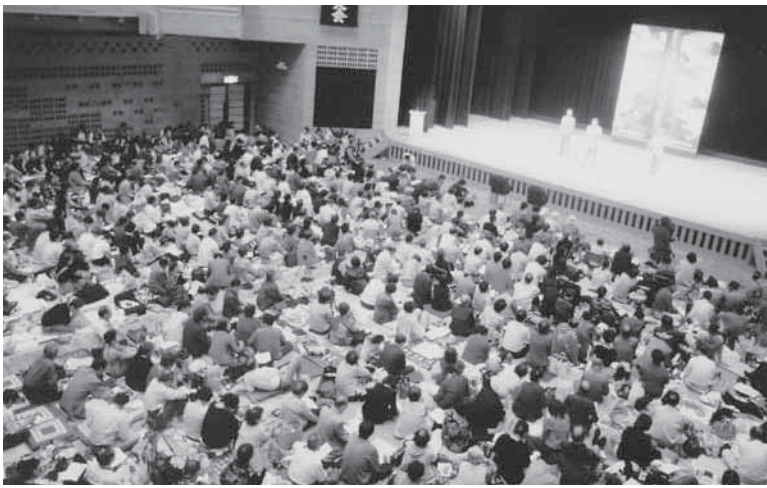
節目の場所を表示して、追分
節の歴史を辿る一工夫があつて
もよいのでは。

第四十二回 江差追分全国大会

優勝 松田美和子さん(釧路) 熟年 成田誠さん(札幌) 少年 木内絵里さん(砂川)

平成十六年九月十七日から三日間、第四十二回江差追分全国大会が、江差町文化会館で開催され、それぞれ第八回大会を迎えた熟年・少年の全国大会と合わせ、約四百名に上る唄い手が日本一の栄冠をめざして熱唱のドラマをくり広げた。

十七日の朝、大会に先立って江差追分会館前で追分歌碑の除幕式が行われると



いう、慶事の後をうけて始まった今年の大大会は、心配された大幅な進行の遅れもなく、盛況のうちに終わった。

注目を集めた一般の部の優勝者は、前年までの二年間に二位、三位と高順入賞に付けていた中標津高校教員、松田美和子さん(二七歳・釧路支部)で、ノビのある美声に加え、笑顔で唄い切った精神面での余裕が、栄冠につながったようである。

一方、六十五才以上の円熟した唄が披露される熟年大会では、やはり前年に二位の好位置を占めた成田誠氏(六六歳・札幌南支部)が、先立った奥さんへの思いのこもった唄で優勝、さらに出場資格が中学生までと限られた少年大会の部では、木内絵里さん(十四歳・砂川支部)が際立った節回しの上で優勝をかざった。全出場者の熱唱が終った後のアトラクションは、前年少年大会の優勝者、中島琴美ちゃんの一本通しの追分を皮切りに、熟年大会優勝の奥泉勇篤師の低音の魅力を生かした追分、次いで前年一般の部優勝者の寺島絵美さんの、追分踊付き

一本通しの追分が終って一段落。

さらに浅沼和子師の江差三下り、夫君の浅沼春義師、木村正二師、石田盛一師、御大の青坂鳴声師と続いて、最後は本年度の花形、イギリス国際音楽祭郷土音楽独唱部門の優勝者、木村香澄さんの熱唱で華やかなアトラクションの幕を閉じた。大会審査委員長から発表された大会の講評は、次のとおりである。すなわち、演唱者とソイ掛、尺八が合わなかったり、出だしの調子が合わない場合があること。また、伴奏者の心がけとして歌をたすけ、情緒を出す必要があること、全体として海の波の感じを出せるようリラックスして自分の味を出せるような唄い手になるよう、平素から練習を積むことの重要性が指摘された。

各大会の二位以下の順位は左記のとおり。

全国大会入賞者

- 準優勝 新保てい子(八雲支部) 48才
- 三位 播磨 孝雄(函館澄声会) 61才
- 四位 間島 秀格(長沼支部) 29才
- 五位 山本 康子(鷗声会) 44才
- 六位 瀧本 豊壽(深川支部) 58才
- 七位 福士 優子(千歳支部) 29才

- 八位 大沢 理絵(静内支部) 29才
- 九位 寺島 絵美(水堀愛好会) 19才
- 十位 古田美紀子(厚沢部支部) 33才

海藤 紀世(ブラジル)

熟年全国大会入賞者

- 準優勝 西村富美子(札幌湧芳会) 73才
- 三位 細木 利良(大平原) 69才
- 四位 佐藤 修三(秋田中央会) 68才
- 五位 田中 光男(大阪なにわ) 67才
- 六位 田中 享子(もりいち会) 68才
- 七位 森井 洋祐(苫小牧支部) 67才
- 八位 千田 文男(ポト神奈川) 67才
- 九位 国府 克(京都ふるさと) 67才
- 十位 山下 愛子(札幌南支部) 68才

審査員特別賞

ひろなかよしと(ハワイ) 73才

少年全国大会入賞者

- 準優勝 渡辺 千秋(帯広支部) 14才
- 三位 榎林 佳世(札幌南支部) 12才
- 四位 川畑 貴寛(和春会) 10才
- 五位 赤石 聖実(声友会) 13才
- 六位 大沢 尚悟(静内支部) 12才
- 七位 藤谷 優美(秋田王藤会) 12才
- 八位 井上 奈菜(網走声友会) 13才
- 九位 木本 朱夏(苫小牧観舞会) 10才
- 十位 福田 光(厚沢部美和) 9才

ひと

第42回江差追分
全国大会で
優勝した

まつだ
松田

みわこ
美和子さん

追分を本格的に歌い始めてから、わずか六年目に輝いた頂点。「優勝旗で輝いた頂点。」「優勝旗を手に、もう一つは重宝です。」「悪い気がしました」と初地元の聴衆も拍手で応え、しばらくとよめきが収まらなかった。

「色ある」歌声堂々と

追分を本格的に歌い始めていた松田さんの才能に、今大会は優勝候補の一人として名前が挙がっていた。審査員に「色がある」と評される個性的な歌手。夏ごろから調子が落ち、死に物狂いで練習を繰り返して来ました。江差入りした後も海を眺めて気持ちを高め、自然体で追分を歌い上げた。

伴奏の尺八に耳を傾け、泣きだすかのような表情で歌いだす。思い描くのは、一獲千金を夢見て北前船に乗り、蝦夷地に渡った先人たちの不安と期待。松山管内江差町で十九日開かれた第四十二回江差追分全国大会決勝会では、堂々とした



「聴いた人が歌い手と同じ情景を思い浮かべるような歌を歌いたい。日本一になったこれからは大変です」
根室管内中標津町在住で、中標津高校の教員。パドミントン部顧問を務める二十七歳。(中島 威)

北海道新聞 平成16年9月21日

亡き妻への思いを込めて

成田誠さん 熟年優勝 札幌地区運協が祝賀会



熟年大会で前年準優勝の成田誠さん(六六・札幌南支部)は、亡き妻への思いを込めて念願の優勝を果した。

成田さんが追分

をはじめたきっかけは十九歳、会社の仕事で九ヶ月間江差に滞在した折、「追分を聞いて何と素晴らしい唄だろう」と感動した。

江差で名人の佐々木千代吉師に追分を習いはじめ、その後札幌に帰り、尺八名人の松本晁章師に出会う。松本師に出会ったことで修業を積み、実力を伸ばし、昭和四十七年、初めて出場した第十回全国大会で五位入賞の実力を身につけた。しかし仕事の都合でその後修業を断念し



少年優勝 木内絵里さん

ていた。そして再び追分をはじめようになったのは妻の死であった。三年前に亡くなった妻陽子さんは「また追分が唄えたらいいね」と生前くりかえしていた。

亡妻陽子さんの思いを胸に松本晁章師の門をたたき、再び追分に挑戦して昨年熟年二位にのぼりつめた。

両手にずっしりと優勝旗を握りしめて晴舞台に立った成田さんは、「今日の追分を聴かせてあげたかった。唄声はきつと妻に届いたはず。家に帰ったら早速優勝を報告したいと思います」(九月二十一日 函館新聞より)と亡き妻への思いを語った。

十一月二十一日、江差追分札幌地区運営協議会は成田さんの優勝祝賀会を札幌全日空ホテルで開催。追分会や民謡関係者二百人が集い行われた。(取材・館 和夫)

「啄木と江差追分」……岩淵啓介

一、啄木、追分を聴く

石川啄木は十九歳のとき明治三十七年（一九〇四年）初めて北海道を訪れた。

小樽にいた姉トラ（夫は小樽中央駅長山本仙三郎）に、上京の旅費や詩集出版の費用を借りるつもりだった。

啄木は、明治三十五年、盛岡中学を五年生で中退し、東京に出て、文学で身を立てようと画策したが、失敗し、故郷の父の家（寺）に帰り、病いを養生がてら、詩作を進めていた。初詩集『あこがれ』は明治三十八年刊行。

小樽に約二週間滞在した。ある日、港の防波堤に立っていると、一隻の小さな漁舟が入って来た。漁師が歌っている。忍路高島およびもないが、せめて歌棄磯谷まで

啄木は翌年、郷土の新聞「岩手日報」に随想紀行文「閑天地」を二十一回連載し、この間の事情を詳しく書いた。

「あれは暮風一曲の古調に心絃挽歌寥々として起るが如く、一身ために愁殺されらんぬ」

啄木に追分を詠んだ歌はない。
二、有島武郎が歌う

その二年後、明治三十九年（一九〇六年）ヨーロッパ旅行中の有島武郎（二十九

歳）はスイスのシャッフハウゼン市の若い画家たちと知り合いになる。十一月二十一日夜、シュトゥツネッガー氏の晩餐会に招かれ、余興に江差追分・忍路高島を歌っている。（日記・観想録）

明治四十年十二月、東北帝国大学農科大学（母校・札幌農学校が、その年九月昇格）の英語講師に嘱託された。

のち大正十一年（一九二二年）の雑誌「寸鐵」に「松前追分―北海道の民謡」を書き、楽譜も載せ、松前（江差）追分の成り立ち、特質を説明している。

三、函館さのさ

函館には、石川啄木の名歌を詠み込んだ「函館さのさ」がある。

昭和三十年（一九五五年）ごろ、蓬萊見番の芸者、友太郎さんが、啄木の名歌を歌いこんだ「函館さのさ」を創案し、作詞作曲して歌った。キング・レコードから『流行民謡 函館さのさ』として、レコードが出て、愛好された。

平成九年（一九九七年）函館市宝来町の高田屋通り、グリーンベルトに「函館さのさ」記念碑が建立されている。

四、江差追分で歌う啄木
江差追分の歌詞は普通、二十六音で構成される。

忍路、高島
およびもないが
せめて歌棄
磯谷まで
七音
七音
五音

しかし、なかには、「字余まり」「五音冠ぶせ」という歌がある。

泣いたとて
どうせ行く人
やらねばならぬ
せめて 波風
おだやかに
七音
七音
七音
五音

語音の構成は、五七七七五、三十一音となる。伝統的な和歌、短歌は、五七七の三十一音である。

啄木の歌を江差追分の節で歌えないだろうか。句の並びを少し移すと、「泣いたとて」の調子に倣って歌える。

「追分ふう」「元歌」

| | |
|---|---|
| 東海の 小島の磯の われ泣きぬれて 蟹と たはむる 白砂に | 東海の 小島の磯の 白砂に われ泣きぬれて 蟹と たはむる |
|---|---|

| | |
|---|---|
| 函館の 青柳町こそ 友の恋歌 矢ぐるまの花 かなしけれ | 函館の 青柳町こそ かなしけれ 友の恋歌 矢ぐるまの花 |
|---|---|

（学芸部理事）

追分節記念誌を 寄贈者に配付

九月十七日除幕した江差追分節記念碑建立の記念誌が建立委員会の編集で十二月一日発行された。

記念誌は記念碑建立基金寄贈者に芳名簿を添えて贈る目的で、建立委員会が企画編集した小冊子。

「目で見る追分節のうつり変り」の副題で、写真と略年表で、追分節のなりたちから現代まで一目でわかるようにまとめられている。

写真は節目で年代毎に大別して時代毎の活動を解説し、動きが理解できるようにしている。

年表では年代を追って追分節の発生から史実による記録が一覧できる。時代時代に活躍した唄い手の写真も添えている。

巻末に記念碑建立の経過と郷土史家宮下正司さんのエッセー「江差追分節の三詞」を添付、表紙はカラー印刷。

記念誌は別冊として印刷発行、一部三〇〇円で頒布する。

懐古・SPレコードを聞きながら(三)

江差追分を愛した三浦為七郎師：高田 裕



三浦為七郎師（明治17年生～昭和25年没）
キングレコード江差追分吹込み記念（昭和14年 54歳）

凛として艶があり、粹でしなやか。
なんとも、不思議な魅力の江差追分を
歌う男がいた。どんな人物なのか。

その名は、三浦為七郎（明治十七年）
一月二八日生、昭和二十五年十二月九日没、
茅部郡森町砂原掛掛出身」という。

祖先（岩蔵）は津軽郡安方町の人で、
天保十一年には先の掛潤でニシン漁場を
経営。そこで彼は、網元・三浦家（屋号・
介）の十一人兄妹の三男として産声をあ
げる。親も期待し、順調にいはば暖簾を
分けてもらって網元としての将来を約束
されていたが、美声と品格のある名調子
そして美男子、生来の歌好きから十八歳
で一座を組んで巡業する民謡歌手とな
る。一座は北海道、東北はもとより東京、

大阪、神戸まで脚をのばし、新潟では駅
に降りたつと火花があがり、町の名士た
ちが羽織・袴に盛装し、一行は劇場まで
人力車で送迎され、その長さは一町（約
百十m）以上になった。と、かつての三
浦派・三羽鳥のひとり、岩内光月師（本名・
元太郎、砂原町出身）は、むかしを懐しむ。
実際、為七郎のステージは浪曲師と同
じように豪華なテーブル掛けを飾り、三
浦家の家紋（まるで三つ引き）の紋付
羽織・袴姿で登場すると、会場は一瞬水
を打ったように静まり、満を持して江差
追分をうたい聴衆を哀愁の世界にひきず
り込む。歌い終って万雷拍手。感きわま
り、すすり泣きも聞かれたという。
その歌声は「三浦派の追分」といわれ、
実に多くのレコード（SP盤・七八回転）
にも遺されているが、大正十二年、第一
回文部省推薦の民謡レコード十一枚のう
ち、彼の追分が三枚選ばれている（江差・
越中谷四三郎師一枚、東京・見砂東楽師
と近藤雷童師一枚）のも特筆に値する。
この大正十二年の関東地方で、マグニ
チュード七・九、未曾有の大地震（九月
一日）があった。彼はこの数日前、横浜
山下町にあったレコード社三光堂で、追

分ばかりでなく、米山甚句、博多節、ナツ
ト節まで吹込んでいるがそのナツト節も
震災直後、新作歌詞を作りショーアップ
を考えた芸人であった。生前、為七郎の
アドバイスで嘉瀬の桃に津軽民謡を習っ
た先の岩内光月師に、俺は運が良かった
とささやいたのは、彼の本音だろう。

しかし、家柄を誇る三浦家としてみれ
ば、芸人の世界は到底許されるはずもな
く、家督を継ぐはずだった。（二人の兄
が早世のため）為七郎は、事実上の勘当
の身でもあった。

昭和の時代になってラジオ放送が始ま
ると、彼の追分人気はさらにたかまり、
一座の興行とレコード吹込みは、軍靴の
足音が聞えてくる昭和十五年頃まで続き
一世を風靡した花形スターであった。だ
が、太平洋戦争が始まると間もなく、妻
の実家に近い鶴岡の仮住まいで、長患い
と失意の末、昭和二十五年の暮れに世を
去ってしまった。享年、六六歳であった。

江差追分會館史料展示室には、彼の肖
像パネルと唄声モニターが備えられてい
るが、初代・三浦為七郎（寒月）は、大
正初期から前唄、本唄、後唄の三部構成
を一般化として定着させた先駆者のひと
り」と評価し、紹介されている。

（学芸部理事）

旭川支部長 佐々木洋子さん
日本民謡協会「師範教授」に認定

追分会旭川支部長の佐々木洋子さんが
昨年、財団法人日本民謡協会から現役最
高位の「師範教授」資格を受けた。

昨年八月に新設された資格で、一九八
八年までに従来最高位「教授」をもつ
ている人を対象に審査が行われ、道内の
五人を含む全国九十二人が初めて認定さ
れた。

三十年前に民謡を始めた佐々木さんは
八四年には同協会の全国大会で運輸大臣
賞を受賞、現在は約六十人の門下生を抱
え、旭川市の忠和中学校で江差追分や和
楽器の指導をしている。

「江差追分が中学生の心にも響くこと
が分かり感動した。これからも若い世代
に民謡の素晴らしさを伝えていきたい」と
語っている。

追分女郎衆の生活

……… 館 和夫

近世の初めから半ばにかけての、いつも知れぬ昔から信州の浅間山麓で唄われていた馬子唄は、ほどなく飯盛女達の三味線にのせられて、追分宿の旅土産、追分節となって諸国へ広まった。

馬を追いながら野放図に唄われていたであろう道中追分(馬方三下り)は、その段階ではつきりした旋律と拍子が与えられ、騒ぎ唄風の座敷唄に変貌をとげていったようである。

さて、追分節の生成と流伝に係わって大きな役割を果たした飯盛女であるが、彼女達の境遇もまた、馬子達と同様に、つらく惨めなものであった。借金に縛られて、行動の自由を奪われていた点、彼女達の苦しみの方が、より大きかったといえる。

追分宿の女達の身売証文は、古くは寛



明治期の追分遊女(軽井沢町志より)

文年間から幕末の頃まで、封建時代の各期にわたって遺されているが、その多くは「年貢諸夫銭、扶持方に差詰り」という理由で、家族の貧苦を救うため、十年以上の年間で身売りされたものである。

証文には、女が盗み、駆落ち、自殺等の不祥事を起した場合には、売主に厳しい負担が課せられる規定が盛り込まれていた。

彼女達は、一旦、宿場に売られたが最後、どんなに苦しくても自殺もできないような境遇におかれていたのである。こ



泉洞寺境内にあった往者の追分遊女の墓(昭和55年1月撮影)

く稀に年期の途中で身請けされる例がないわけではないが、大方の場合は年期が明けても借金が払えず、ひきつづき下女勤めなどをさせられ、生涯宿場の下積み生活から逃れられない宿命を負った不幸な女達であった。

数ある追分節の文句の中には

あいや追分 沼やら田や

行くに行かれずひと足も

という、彼女達の身の上を端的に物語る歌詞が伝わっているが、土地の風土と人情を牧歌的に唄った文句が多い中に、一体これはどうしたことかと、長い間、私の心の隅に引っ掛っていたが、これを宿場の繁栄の犠牲になった飯盛女達が、日頃から胸に秘めていた魂の叫びとしてとらえれば、なるほどとうなずけるような気がする。

娘の身売りは、本人ばかりでなく家族にも深い心の傷を遺したようである。少し古いが、天和二年(一六八二)に記された一札之事という古証文には、一両二分で飯売女に売られたちよという女が自害をした結果、抱主から借金の一括返済を迫られた兄が、「ちよ之儀は、ぢがい仕り候へば、命さへすて申候、金子之儀

は、貴様御そんに遊され下され候様に」と、さまざまに訴えた結果、ちよ身代金御赦免遊され下されかたじけなく存じ奉り候」と、妹の仇敵ともいふべき抱主宛に礼状めいた証文さえ書かされている。

人間を「売物・買物」としか見ない封建時代の残酷な社会の仕組が、いまさら空恐ろしく感じられるが、しかし、ひるがえってみると、今日でも事情はさして変っていないようにも見える。都会に林立する高利貸の看板や金のために風俗店で働かなければならない女性の実態を見聞するたびに二、三百年前に宿場町の女達を覆っていた闇の深さと、今日、まばゆいネオンの蔭に隠された浮草稼業の闇の深さと、果していずれの闇が深いか、皆目わからなくなってくるのである。

(学芸部理事)

千葉栄人さんの新曲CD

第二十七回江差追分全国大会優勝者

『追分慕情・江差追分』

CD・カセットテープカラオケ付

定価 一、二〇〇円(CD)

一〇〇〇円(カセットテープ)

問合せ 〇一九一六四一―三六七五

(前号記事「江差慕情」は誤植)

江差追分節記念碑の除幕 全国大会開催前に一六〇人参加

江差追分節記念碑の除幕は去る九月十七日、第四十二回追分全国大会当日に行われた。

来賓をはじめ、全国各地の追分会支部長、会員一六〇名が参加して本唄「鷗のなく音に…」歌碑の完成を祝った。

碑文は「鷗のなく音にふと目をさまし、あれが蝦夷地の山かいな」本唄歌詞が地



元書家岩佐宏洞氏の揮毫で、墨痕鮮やかに彫り込まれている。裏面には追分節発祥の地を表現する「江差追分節の里」追分節なりたちの歌碑が記されている。

碑石は石英系自然石で建立委員会が日高平取町に赴いて選定した、高さ三・六メートル、幅二・六メートル、重量三五トンの巨大石。

追分会館の前庭にどっしりと据えられ、添景石を配して、石庭風な景観に仕上げられた。

来賓を代表して平沼栄二松山支庁長が「江差追分はこの碑とともに『民謡の王様』として国をこえて世界の人に愛されるだろう」と述べ発展に期待をよせられた。

記念碑は元江差町長の本田義一氏（現追分会顧問）の提唱により、全国の追分会会員、指導者をはじめ、愛好者有志の寄金によって建立が実現した。

除幕式に車椅子で参加した提唱者の本田さんは「私の念願だった記念碑が全国の会員や愛好者の方々の総意で実現できたことは感無量です」とよろこびを語った。



第十三回江差追分松山大会 寺島絵美さん連続優勝の快挙

一般二部 川畑美枝子 少年で貴寛親子 熟年 能登谷秀雄

江差地方の江差追分会支部の歌い手たちが練習成果を競う「第十三回江差追分松山大会」が十一月十四日（日）江差追分会館で開催。

全国大会出場経験者出場の一般第一部で乙部町の寺島絵美さん（二〇）が前年につづいて連続優勝を果たした。

松山大会は地元江差追分協議会の主催で一般一部に三十一人、二部（出場未経験者）三十五人、熟年二十一人、少年

十七人が出場した。

優勝の寺島絵美さんは三姉妹の次女、姉絵里佳（前年全国大会優勝）と妹真里絵（一部二位）の三姉妹で追分に取組んでいる。

二部では上ノ国町川畑美枝子さん（三九）が優勝、少年組で貴寛君（一〇）が最優秀賞で親子が優勝した。

熟年優勝は松前町の能登谷秀雄さん（六九）。

江差追分の文化活動で

函館声徳会支部、白鳳章受賞

函館市文化団体協議会

長年にわたり文化芸術活動に貢献した個人・団体に贈る「函館市文化団体協議会の白鳳章」に、函館声徳会支部（内村徳蔵支部長）が選ばれ、十一月三十日、同協議会創立四十周年記念式典で贈呈された。

声徳会支部は長年老人福祉施設の慰問をつづけているほか「投げ銭チャリティーコンサート」で江差追分や民謡を披露している文化活動が認められた。

（取材・松村 隆）

愛知に響け 江差追分

追分を生んだ江差の風土や文化を伝える
「江差追分うたがたり」を聞く。

町並みや風土の変遷をとらえた写真約五十点を展示する。

北海道新聞 12月3日

新旧日本一の5人 19日に豊田で共演

江差追分会愛知三河支部 一部構成で一部は道南に
(同県岡崎市)の主催。舞 伝わる民謡が中心。現役の
台に立つのは、昨年度の道 漁師でもある青坂さんが昔
文化財保護功労賞受賞者で のニシン漁の様子などを語
江差追分全国大会第六回優 り、網を引く時に声を合わ
勝の青坂満 郷を離れて働く人々の心は
さん(左)、 同じはず。
同初回優勝 蝦夷地で苦
の近江八声さん(左)、同第 せらために歌う作業唄(一
二回優勝の小笠原次郎さん り声)も披露する。二部は
(左)、同二十九回優勝の木 それぞれに味がある江差追
村香澄さん(左)、同四十 分を一人ずつ歌う。また、
回優勝の寺島絵里佳さん 合わせは愛知三河支部
(二)の五人。 会場では江差フォトクラブ 564・31・2080へ。
代表の松村隆さんが江差の (中島威)

写真も交え風土紹介

労した先人

江差追分渡島協議会設立

平成十六年十二月十四日(火)函館市昭
和町会館に於いて、念願の『江差追分渡島
協議会設立総会』が、役員及び支部代表
オブザーバーの方三十三名が出席し、盛大
に開かれました。

石田盛一副会長の開会誓言で始まり、市
戸脩会長より『念願の江差追分渡島協議会
が設立されることに、慶びを感じます。こ
れからも、皆様のご協力をお願いします』
と挨拶がありました。続いて来賓として、
江差追分会副会長、坂本勇様が挨拶に立ち、
『歴史に残る渡島協議会設立総会に挨拶がで
きることは、私にとって光栄であります。
これから一つになり、他からうらやましく

なるような渡島協議会になってほしい』と
いう挨拶を頂きました。

さっそく北支部の山内藤一さんを議長に
選出し、内村事務局長より、今日までの流
れを報告され承認された。また、議案第一
号、『第一回江差追分渡島協議会発表大会』
(案)を平成十七年三月二十七日(日)函館
市公民館に於いて開催されることを満場一
致で承認、さらに議案第二号、収支予算(案)
も承認された。最後に議案第三号の会則、
規則(案)を提案し、質問を受けた。

質問者から、会則の目的・会員の交流及
び研修をとおしての考え方の質問があった。
事務局としては、少予算で大会を開くこと
は大変なことだが、大会をとおしているい
ろんな方の歌を聞き、学んで行ってほしい。

将来財政が増えた場合、いろいろな事を考
えて行きたい。また、他の方から関連した
質問があり、今一番やることは来年の三月
の大会だ。その中でいろいろ交流もできる
のでは。財政が大変ではこれから事業など
できないのでは。江差町の江差追分協議
会などが開いている紅白歌合戦みたいな事
業を今後取り組んで行った方が良く、とい
う前向きな質問がされた。事務局として
も、とても良い質問なので、三役会議に提
案することを約束。議案第一号、第三号議
案を満場一致で承認され、佐藤隆広副会長
の閉会の挨拶で、全国二番目となる独立さ
れた協議会がスタートした。
(内村徳威)



役員ひとりづつあいさつ

事務局から

第二十期追分セミナーの開催
二月三日から二十六日まで、毎週、木・金・
土曜に開催されます。貴方も追分節の上達
にチャレンジしてみませんか。参加申込は

追分会事務局まで。(各週とも定員になり次
第締切いたします。)

江差追分会師匠会研修会の開催
二月二十日に江差町で開催されます。参加
資格は四級秀以上の有資格者が対象です。同
日に江差追分会師匠会総会も開催されます。

追分会会報「ヤンサノエ」に投稿を
ヤンサノエは学芸理事の皆様が力添えに
より発行しておりますが、全国各地の支部
の動きを広く会員の皆様にお知らせするた
めに、情報提供をお待ちしております。

あとがき

大型台風と中越地震に揺れた平成十六年
が暮れようとしています。師走も押し迫っ
て漸く「ヤンサノエ」No.3の発行にこ
ぎつけることができました。

ことしは追分会にとって画期的な事蹟
を生んだ年だったと思います。七月、第
二十九回大会優勝の木村香澄さんが、欧州
最大の英国際音楽祭・郷土音楽独唱部門で
江差追分を唄い優勝の快挙をなし遂げ、九
月、第四十二回大会前には、江差追分節発
祥の歌碑を除幕、後世に遺る記念碑を打ち
立てました。

記念碑誌も追分節のうつり変りを要約し
た資料として、平易にご利用いただけると
思います。

会員のみなさま、よい年をお迎え下さい。

【編集】 岩淵啓介・松村 隆

館 和夫・高田 裕

【企画】 山崎 透・森山弘之

沢田博生